

つながる世界 : 自然と祈りと宮崎駿の世界

著者	釣井 龍秀
雑誌名	真実心
号	35
ページ	11-45
発行年	2014-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000471/

つながる世界

——自然と祈りと宮崎駿の世界——

釣井龍秀

こんにちは。釣井龍秀と申します。森際先生との御縁によってこのような場を大学の皆様方にいただき、心から感謝をいたしております。ありがとうございます。

私は高知県から来ました。地図で言いますと、四国のだ真ん中より少し東に位置します、豊永郷とよなが郷という地域から参りました。この豊永郷という地域は過疎化が進む場所です、六十五歳以上が五〇%を超える地域です。この山間の秘境のような地域にいますが、私は、チベットやネパールなどに興味が有り時々行っていました。そんな私をみて友人が「お前、そんな標高の高い山の中で生活をしていながら、まだ高い山に行くのか」と言ったり、またネパールの友人は、私が住んでいる地域の写真を見て、「これはネパールのどこだい？」と聞きました。そのような場所が私の住んでいる豊永郷でございます。大変山

深い所にございます。若い人があまりいないため、このように若い方の前でお話する機会
はめったにございません。少し緊張いたしておりますが、みなさんは硬くならず、リラ
ックスしてお聞きいただければありがたいと思います。

京都光華女子短期大学のことを少し知りたいと思い、ホームページを拝見させていただ
きました。多くの学科があり、各自が自分たちの目標を定め、授業を選択し学ばれている
ことがわかりました。一つの目標に向かい取り組まれる姿勢はどのようなことにおいても
美しい姿だと思えます。先ほど紹介をいただきましたが、私は大学で工学部にいました。二
年生からだいたい研究室に入って学ぶのですが、みなさんのように真面目ではありません
でした。今日のように金曜日の五時間目という授業ですとだいた次の予定のことで頭が
いっぱいでした。そういった中で学生生活を送っていましたが、大学生活も楽しく研究も
楽しかったです。周りの人に助けられながらいい経験をさせていただきました。しかし一
つ後悔をしていることがございまして、「なぜ、あの時にもっと、いろんなところに旅行
に行かなかつたんだろう」と後悔をいたしております。時間を取りやすい大学時代に、い
ろんな所に行つて見聞きすることは有益なことだと思えます。是非、皆さんも旅に出てく
ださい。昔から日本人はよく歩き、行き来をしていたようです。

つながる世界

大学時代から私が今まで継続して好きだと自信を持って言えるものが、漫画を読むことです。実は私、高校時代まで父に漫画を読むことを規制されていました。大学時代になってから、一人暮らしをはじめて本格的に読みはじめました。高校時代までの反動はさまざまに大学時代の四年間、週刊誌は七冊、隔週の漫画を一冊、月刊誌も二冊読んでいました。女性が読むような『動物のお医者さん』や山下和美さんという作家の漫画も好きでした。好きな漫画の一つに『MASTERキートン』があります。最近テレビでも放送されていますのでご存じの方もいらっしゃるかと思います。この『MASTERキートン』の主人公は、保険の調査をする仕事の傍ら大学時代から学んでいる考古学の研究もずっと続けているという太一・キートンという人物です。彼が様々なサスペンスに巻き込まれながら活躍する物語です。物語の中でキートンの大学時代の担当教官としてユーリー・スコット教授が登場いたします。彼のセリフで印象に残ったものがありました。

なぜ人は憎しみあい、殺し合うのでしょうか。それは人間そのものの中にあるサガによるものです。戦争を避けるためには、我々はよりよく人間を知らなければならぬ。考古学によって過去の人間を知る必要があるのです。

という箇所です。実はこれは考古学だけに限ったことではなくて、多くの分野でも言えることだと思います。どのように人は物事を見つめるか、また見つめてきたかを知るということは、これから先、みなさんが様々なことを判断する中で大変重要な要素になるはずで
 す。仏教に「身口意」という言葉がございませう。これは「身」が身体、「口」が言葉、「意」が心ということですが、自分以外の他の人に物事を伝えるには、身体を使った表現方法である書くことや、パソコンなどの道具を使うことや身体で表現する表情と言葉でしか、人間には伝達手段がないと言われています。これらの行動の元になっているものが心とされています。心で感じて、心で何かを蓄えられていないことは言葉や態度にも表情にも出すことができないと私たちは考えています。みなさまが大学の授業やバイト、外を歩いている時やテレビなどメディアを見て感じたことが心の中に蓄積されて、どこかにしみこみ、それがふとした時に出てくると考えています。蓄えられている場所を、仏教ではアーラヤと言います。ちなみにヒマラヤは「雪が蓄えられた場所」ということで、「ヒマ・アーラヤ」でヒマラヤです。炊事や洗濯、また「この道の方が近道かな、安全かな」など、日頃の些細な判断から人生を左右するような大きな判断まで、すべて人が心で感じたことが大きく影響していると考えています。この心は、世界中どの地域を見ても祈りや信

つながる世界

仰、宗教から大きな影響を受けています。例えば中世ヨーロッパでは、キリスト教の影響を受けていない芸術作品や音楽はないと言われるほどです。また日本においても、多くの事柄が祈りや信仰に関係している事が多いと感じます。この京都も祈りや信仰と深く関係してきた町です。そのように考えますと、自分が現代社会で物事をどう見るか、どの視点で見るかは、一人一人の心と関係していることになると思います。その心がまた祈りの影響を受けていると考えますと、人間を知る要素の一つに、「祈り」や「信仰」が大変重要な役割を果たしているのではないかと思います。

人間を知るための作業の中で、過去を振り返る時に気を付けなければならないと思うことがあります。今、みなさんが生活している中では、今の出来事、今思っていることが常識だと思っています。誰もがそう感じます。しかし少し前の方からすると、今起こっていることは常識ではないことの方が多いと思います。私たちが過去を振り返る時には、今の私たちの常識で過去を振り返ってしまいますが、実はそういったことには注意しなければならぬということなのです。例えば正座です。私は正座が苦手です。みなさんは正座と言うとどのような印象をお持ちでしょうか。日本の伝統的な座り方とか、正しい座り方と書く

ので日本古来の座り方と考えている人もいます。実はこの正座という言葉は明治時代まではなかったようです。「堅座^{けんざ}」とか、「かしこまる」などと様々な言い方が残っていますが、少なくとも正座というのは一般的ではなかったようです。真言宗の経典にも「堅座は日本の略式の座り方だからすべきではない」と書かれています。なぜ今、正座をしているのかということになりますが、江戸時代に吉田松陰という方がいらっしゃいました。この方、この青い着物を着られている時に書かれた肖像画は、存命中に描かれたものです。その時は安座で描かれています。没後、幕末に近づくに従って正座をしている絵が多くなります。このことが記されている本には、時代的な背景や思想が関係してきたのではないかと書かれています。それ以前はどうだったかと思いきますと、正座ではなくて、安座、あぐら、立て膝などの膝を立てて座るのが主流だったと言われています。徳川家の時代になってから、着物の身幅の変更や、諸条件によって正座が広まったといわれています。正座という言葉自体は明治以降の学校教育によって広まったとのこと。このように過去から何かを学ぼうとした時に、今自分が思っている、感覚に囚われすぎると、その本質、本来の姿が見えて来ないということが時々ありますので、気を付けなければならぬと思います。これからお話しすることも「ふうくん、そんな考え方もあるのか」と

つながる世界

聞いていただければありがたいと思います。

私は四人家族で父は教師、母は栄養士、兄は医者の一一般の家庭で育ちました。大学は工学部を卒業し大阪の一般企業に就職し主にカーナビを作っていました。コンピュータのプログラムの仕事にたずさわっていると何をしていてもどこかでそれを考えてしまう傾向がありました。それが嫌で、よく鴨川で缶ビール飲みながら座っていたり、お寺の境内をボーッと歩いたりということがありました。その一般的な環境に育った私が、縁があつて僧侶の修行に行くことになりました。真言宗はいくつかの派に分かれており私は智山派の僧侶です。本山が東山七条の智積院という場所です。一年間そこに閉じこもって修行をいたしました。本山が東山七条の智積院という場所です。一年間そこに閉じこもって修行をいたしました。智積院での一年間の修行が終わって帰るのですが、たった一年の修行が終わっただけでしたので帰ってから分らないことがあり、多くの疑問を抱えていました。例えば、お釈迦さまと仏さまである阿弥陀如来さまやお地藏さま、お薬師さまと私は真言宗の僧侶ですので弘法大師空海さまの三者の関係がよく分かっています。またご覧になられましたように私の住む場所は四国でも秘境のような場所として、経典とか教科書には書かれていないような祈りの姿が多く残っていました。これらのことを理解するた

めにどうしたものかと大変困りました。しかしその疑問がきっかけとなりあらゆる分野に興味をもちはじめました。少しずつ世界中の宗教とか祈りを見ていくうちに、「祈り」に興味を持ちました。「祈りって何？」ということ。みなさん、「祈りって何？」と言われて、何々ですって答えられる人は少ないと思います。また何をもってして祈りかということもあるかと思えます。私は初めに「祈りっていつから記録があるの」というような起源が気になりました。そうすると行きついたのはネアンデルタール人とクロマニヨン人でした。宗教のことについて学ぼうと思っていたら考古学に行きつきました。また地域のことを知ろうとすると文化人類学や民俗学などをみつめる必要があることに気が付き、これは大変なことになってきたぞと思いました。

みなさんは「祈り」という言葉を聞くと、今現在、どういうふうな印象を持たれるでしょうか。現社会で生活をしていますと、祈りさえすれば全てが上手くいく、と思う方は少ないと思います。みなさんは小さい頃に「あした天気になあれ」という言葉を使ったことはないでしょうか。遠足の前の日にてるる坊主を作ったりした記憶は誰もがあるのではないかと思います。あの「明日天気になあれ」は誰に向かって言っている言葉なのかを少し考えてみますと、あえて言うならば、目に見えない、自分の力を超えた、何か

つながる世界

分からない存在に対して「天気になってください」といつていることになるのかなと思います。ということとは、ひよっとしたら「明日天気になあれ」という言葉も、生活に密着した「祈りの言葉」なのかも感じます。

この「祈り」について調べる中で、沖縄の琉球文化や北海道のアイヌ文化に触れる機会がありました。二年前、波照間島に行き、そこで琉球音楽のCDと出会いました。そのCDは日本に返還される前の沖縄で録音されたもので興味を持ち買いました。そのライノーツ(CDの解説に書かれている言葉)が大変印象的なもので、その言葉をちよつと音楽と一緒に聞いていただきたいと思います。

南海の孤島で島人の暮らしは厳しく、神の恵みにすぎることが幾百年にもわたって島の命に関わることでした。(中略)村の拝所うがんじよだけでなく、聖なる森の中、井戸端でも、通りの道の地中深くに向かつて、浜辺では遠くの海の彼方へも、高く空の上までも祈りを届ける。間違いなく唱えるために自然に節がついたようで、村ごとに神事ごとに、異なる調べ、それが例えようもなく吹き荒れるようで、録音していることも忘れるほどでした。なぜだかなつかしい。ああ、祈りが高まると歌になっていくの

か、と思いました。(中略) 祈りがつのつて唄になり、舞になり、喜びが高まって歌になる。踊りになる。

『波照間 古謡集1』アウエハント静子

という言葉が書かれていました。人は祈らずにはいられないということです。その祈りは、実は生活にも密着した中から生まれてきた自然なものだということです。

では何故このようにお祈りをするのでしょうか。私にはこの京都に、ウイゲル自治区から来たイスラム教の友人がいます。同級生には牧師の友人もいます。仏教以外の友人がたくさんいます。彼らの敬虔な祈りをする姿は大変美しいです。「祈りとは何だろうか」と考えるようになり、学びはじめると、祈りに共通した点があること気づきました。それはどのような祈りも信仰も宗教も「安心して生活をしたい」という願いがその根底にあるということです。それぞれの文化とか種族とか宗教で「安心」という基準はもちろん違うと思います。でもその祈りに共通しているものが「安心」ということでしたら、何か共通点を見つめる、それを見つめることは有意義なことだと思います。

最初の祈りの痕跡がクロマニヨン人と呼ばれる人たちの遺跡から見つかっているという

つながる世界

ことです。みなさんもネアンデルタール人とクロマニヨン人という言葉は聞いたことがあると思います。実際にこれが骨です。向かって左側がクロマニヨン人、右がネアンデルタール人です。このクロマニヨン人が我々の先祖になります。ネアンデルタール人は違います。両者の違いは、後頭部が少し小さくなっています。小さくなったおかげでネアンデルタール人よりクロマニヨン人はちよつと背が伸びたように見えます。この変化によって何が起こったかと言いますと、脳の中の神経組織が繋がり、あらゆることを感じ始めたといわれています。そしてこの時に獲得したものが「想像力」のような、イメージすることだつたと言われています。これが人類にとって大変大きな出来事だつたと言われています。脳の話になると長くなりますのでやめておきます。例えて言いますとネアンデルタール人は「ライオンが強い」と言うことは言えませんでした。「武井壮が強い」ということも言えませんでした。でも「武井壮はライオンのように強い」ということがネアンデルタール人は言えませんでした。このように比喩的な表現をするためには「強い」ということを基本にして想像する、イメージをするということが必要だからです。そのイメージをする能力がクロマニヨン人にはありません。ネアンデルタール人にはなかったと言われています。今後の発掘によって変わってくるかもしれないですが、今はそのように言われています。この

感覚を持つことによって人類が初めて獲得したのが、「宗教的感覚」と「芸術」だったと言われています。ネアンデルタール人の頃には見つからない洞窟の壁画が、クロマニヨン人以降にはたくさん見つかっております。この絵を見ていただくと芸術的思考がある
 とよく理解できるのではないかなと思います。現在見つかっている最古のものは三万二千年前のものです。実はこの洞窟にはもう一つ役割がありました。その役割の跡が世界で古い時代の儀式として洞窟の中に残っています。儀式で重要な役割をしていたのが「熊」です。熊の骸骨とか頭蓋骨、また熊の体を模した粘土のようなものがあり明らかに何かの儀式をした跡が残っていました。熊の儀式は北海道のアイヌの民族でもおこなわれています。
 デイビッド・ロックウエル氏は『熊の声を聞け』という著書を著わしています。ネイティブ・アメリカンのクリー族のことが記録されています。その中に猟をして持ち帰った熊の毛皮と肉を剥いで、その剥いだ後の骨を女性が綺麗に飾っている様子が描かれています。その飾り付けをした骨を靈魂と一緒に自然界に返す、熊の靈と一緒に返すということが記されています。彼らは熊が毛皮と肉を持って私たちの前に現れてくれた、富を持ってきてくれたと考えているのです。そのお礼として骨を綺麗に飾って熊の精霊を送り返してあげると、また自分たちのところに熊が帰ってくると考えていたようです。しかし結果

つながる世界

だけを見ると、熊を殺したという事実があり、また殺された熊にとっては殺されたくなかったという思いがあるかもしれません。古代の人々たちは、豊富に富のある自然が気前の良い贈り物、贈与という形で、熊という富を与えてくれるという感謝と敬意、またその「死」を何とか理解しようとして、自分たちが思う方法で感謝をして敬意を表したということなのだと思います。

このような儀式は世界中に残っています。太陽が東から出て西に沈むのは当たり前ですし、月が満ち欠けするのも当たり前ですが、これは古代の人たちからすると大変不思議なことで、空から雨が降ってくることや雷が鳴るということも不思議なことだったと思います。また、自然の山や森には木の実があり、動物がいて、人間の食料となります。自分たちにとっては自然は貴重な富がある場所と考えていました。我々の住んでいる世界、社会と、自然の世界をある一線を境にして対称的であると古代の人々は考えていたと中沢新一氏は述べてられています。人間が自然に対して好き勝手に野蠻に振る舞ってしまうような目線で自然をとらえていたのではなく、ある一線を境にして対称の関係にあったのではないかということです。その自然界との間を繋ぐ通路がシャーマンと呼ばれる宗教者や神話や

物語、熊の精霊だったのではないかと述べられています。対称性の思考を持つ人々が感じていたように自然の中に住みながらもそのすぐ横には自然との境があるというような感覚は、京都に住んでいると近くに様々な「境」があるので、皆様も何となく感覚的に感じることもあるかもしれません。

真の権力があり、力の源である自然と人々を繋ぐトンネル、また通路の役割をする存在がシャーマンや神話、物語、精霊ということです。この精霊のことを折口信夫氏は、「タマ」という呼び方をしました。フランスでは「エスプリ」、英語圏では「スピリット」、ネイティブ・アメリカンでは「ハウ」、ポリネシアの方では「マナ」等々いろんな呼び方がされています。世界中で精霊たちは感じられていたということです。これを宮崎駿氏は「木霊」という形で表現しました。『もののけ姫』では主人公のアシタカが、「お前の母親は立派な木だなあ」というセリフと共に木霊と大木が登場いたします。自然の大きな存在と我々を繋ぐ存在として語ったものが「木霊」ということです。このようなアニメーションの語源のアニメイトには「生命を与える」とか、「生かす」という意味があります。ラテン語の語源をみますと、「靈魂」、「息」という意味もあります。「息」は、吐いた息がその人そのものの思いに繋がっていたということだと思えますが、そのことが『もののけ

つながる世界

姫』の最初のシーンで登場します。アシタカの妹のカヤがお守りを渡すシーンです。「お兄さんをお守りするように息を吹き込めておきました」というセリフが出てきます。そのものに息を吹き込めて、私の代わりにこのお守りがあなたをお守りしますという思いが表現されています。こういったエスプリとかハウとか精霊というのは、世界中、自然のあらゆるところに宿り、万物にあると考えられていたようです。これらの存在はイメージの延長線上にあらわれてくる存在だと思います。日本的な言い方をすると、世界中に八百万の神々がいたということです。

古代の人たちは、モノには靈タマとかエスプリが宿ると考えていました。この精霊たちが止まることが良くないことだと考えていた社会がありました。ネイティブ・アメリカンの生活からも、止まることが良くないと考えている様子がうかがえます。人からもらったモノにはあらゆる「ハウ」が宿っていると考えていました。例えば、誰かにプレゼントする時にはプレゼントした人の思いがこもっていると考えます。プレゼントが手作りで、手間暇がかかっているものには強くそれを感じます。それが自分だけのものとなり止まるとは良くないと考えていたようです。例えば、Aさんがお大根を作りました。そのお大根をBさんに渡します。Aさんが作ったお大根は、自然の力やAさんの思いが「ハウ」として大

根に精霊が宿っていると考えていました。それを、Bさんは自分だけのものにするとはよくないことだと考えていました。その思いも含めて次の人、今度はCさんに、人參なり、別の形で渡します。Cさんはまたそういった思いを全部受けとめて、次の人に渡します。そういうふうにしてあらゆるものが社会を巡る、そういった精霊たちが回っているという状態が良い社会と考えていました。それが彼らの安心できる社会だったのです。マルセル・モース氏は、『贈与論』の中で

契約のいくつかの形態は、讓渡という行為によって生まれる人々との精神的絆の体験に結びついているように思います。モノそのものにより、つまりモノの魂によって相手に結びつけられているのである。

ということが書かれています。これを私たちの社会で考えてみますと、日常生活でモノが行き交うという様子に気付くと思います。お歳暮、お中元、年賀状など様々なモノをお互いにやり取りします。また、近所の方からお裾分けを頂きます。モノが人と人の間を流れることによって人との繋がりや絆がどんどん深まっていく、強くなっていくということ

つながる世界

感じたことがあるのではないでしょうか。モノには贈り物をする時に、精霊が宿っているという考えです。贈り物に宿る精霊を一般的には「贈与の霊」と呼ばれます。この贈与の霊を作家のD・H・ロレンスという人は、「大地を環流する風」と言いました。人間の心に、不信感とか、相手を信じないとか、贈り物をする相手が欲望や支配をしようという思いでモノを渡すと、その瞬間に風の動きは止まってしまいます。また風自体を信じてない人には、贈与とか巡るということは最初からありえないと述べられています。私の好きなレヴィ・ストロース氏は、この風を「ゼロ記号」と言いました。ゼロという数字はそれ自体では何もないということを表していますが、ゼロがあるお陰で「1」もありますし「マイナス1」もあります。ゼロがあるから場があるということです。それ自身では何の意味も価値もないのですが、それのお陰で社会のシステムがあると考えたのです。人間と人間、人間と自然界の関係において真のコミュニケーションを発生させるにはこういった精霊たちが深い関係をしているのではないかなと感じます。精霊たちの存在をどう捉えて、どのように思考してきたかということが世界中の社会の成り立ちと深く関係しているのではないかと思います。

先ほど風と言いましたが、「風が止まる」「宮崎駿作品」となると登場するのはやはり

『ナウシカ』です。ナウシカは風の谷という所に住んでいます。風の谷には風が吹いているお蔭で腐海の胞子が飛んでこないために生活ができます。風があるお蔭で生きていけるという谷なのです。そこにトルメキア軍という人たちが、私欲と権力、暴力で風の谷を支配しようとしています。その瞬間に風が止まります。風の谷に風が吹かなくなるのです。「あ、風が止まった」というセリフがあります。このような風の考え方は私の住んでいる豊永郷にも残っています。お葬儀の後に風が止まらないようにする為の儀式が残っています。

ナウシカのさらに魅力的なところは、死の精霊というべき社会から嫌われている胞子は、実は私たちが生きている世界の悪いもの、汚れたものを綺麗に浄化し、それが新しい自然を作り出している、再生してくれている場所であるとナウシカは気づきます。仏教的にも興味深いですが、時間がなくなるので省略します。

ナウシカの存在ですが、原作の漫画を見ていただきますと、ナウシカのところに来たトルメキア軍のヴァア王という王様が、ナウシカに向かって、「お前は、破戒と慈悲の渾沌だ」というセリフを言います。また、巨神兵が、アニメーションではセリフを言いませんが、原作ではセリフを言います。「小さき母」と、ナウシカに向かって言うのです。これはケルト民族などヨーロッパにもある信仰で、大地母神、ダナ、地母神、大地の母というよう

つながる世界

な存在がナウシカと重なります。

ナウシカで印象的なもう一つのシーンは、空を飛んでいるシーンです。飛ぶということ
は空と大地の間に留まっているということです。「金色の野に降り立った」という有名な
セリフがありますが、王蟲オウムが金色の糸を出しナウシカを支え空中を歩いているようなシー
ンが登場いたします。空と大地の間を歩いているのです。古代から、天と地が近づきす
ぎると雨が降りすぎる、天と地が離れすぎると雨が降らないといわれるように、空と大地
のバランスが大事だと考えられていました。バランスをとるために様々な祈りや空中留ま
る技術や儀式が行われ、今に至るまであらゆる形に変化しながらも残っています。その一
つが、京都でも行われる蹴鞠です。また中国では雑伎が宙に留まる技を發展させてきたと
言われています。そのような視点でナウシカを見ますと、精霊である風の存在であり、大
地の母であり、天と地のバランスをとる存在といえます。

こういった、風のような「ハウ」とか「たま」とか、真の権力ある自然界と我々の社会
を精霊たちが往き来している状態が安心した状態だと昔の人たちは考えていたようです。
真の権力の持ち主であるのが自然と考えた人たちが不思議に思ったのが、太陽と月のこと
だったと思います。同じ場所から出て違う場所に沈んでいって、また次の日になったら、

また同じ場所から太陽が出てくる。明るくなって暗くなって、暖かくなって寒くなる。月は毎日形が変わります。ある時無くなり、無くなったらまた出てきます。このような現象は不思議ことだったと思います。そういつたことから太陽と月は、「生と死」、「死と再生」という形で語られたりもします。昼間を「生」の世界と考えると、夜を「死」の世界と考えます。

太陽の様子からできた言葉もあります。例えば東という言葉、「ひ・むかし」という単語が結びついて東という言葉ができてきます。「し」は方向の意味です。だから太陽の向かう方向が東、太陽が行ってしまう方向が西ということで、太陽の昇り下がりでも東西という言葉ができたと言われています。八重山諸島では「あんた」上がったが東、「いんた」行ったが西です。また琉球の言葉ではあがりか東という言葉です。太陽が上がってくる様子、明るくなってくる、あかるから「赤」という言葉となり、日が暮れる、暗くなるから「黒」となってきたということが言われています。今、白の反対は黒、白黒はつきりつけると言いますが、本来は赤と黒が対の言葉だったのでないかと言われています。太陽が出ている間は明るい「生」の世界、夜は暗い「死」の世界と考えますと、「生」の世界である太陽がもつとも弱くなるのはいつだと思えますか。冬至です。夜が一番長くなり昼間

つながる世界

が一番短くなる日です。この冬至が死の世界の精霊たちが増え社会のバランスが崩れた状態と昔の人たちは考えました。ヨーロッパでも同様です。その他にも多くの地域で同様に考えられていたようです。このバランスの崩れ始める時期というのが、秋分です。秋からだんだんと死の精霊たちが増え、円滑に動いていた「生」の世界の精霊たちが滞ってくと昔の人たちは考えて生活をしていました。ナウシカの風の谷に腐海の胞子がやってきて、平和な社会を崩したようです。滞っている流れをまた元のように円滑にするにはどうすればいいのかと考えます。モノには精霊が宿るという考え方から、心からの贈り物をすることで生の精霊を増やし我々の世界に入り込んできた死の精霊とのバランスをとろうとするようになりました。この思考方法を知るとお布施やお供えをするという感覚が何となく理解できるようになりました。また冬の時期というのは重要な時期でした。折口信夫氏は、冬の語源は、「ふゆる」から来ていると述べています。何が増えるかというのと、精霊たちが増えるということです。冬に弱っている精霊たちを春に向かつて増やすための重要な意味が冬の祭りにはあり盛んに行われました。日本でも裸になった男の人たちが何かを奪い合ったり、お湯を大地にかけたり、棒で大地を叩いたりする、という儀式が各地で行われています。精霊たちを増やして、大地や社会に活気を与え春に草木が芽吹き、五穀

豊穰であるようにと願う、冬の祭りは世界中で大事な祭りだったようです。みなさんの周りの冬の儀式やお祭りを見ていただければ、精霊と関係しているのかもと思えるようなものがあるかもしれません。

みなさんの中にはまだ成人式を行っていない方もいらっしゃると思います。昔はちゃんと通過儀礼を受けた人のみが社会人として認められていました。受けてない人は社会の外の人であり精霊たち側の存在でした。子どもたちは精霊たちの存在でした。そこで少し考えていただきたいのですが、「冬の儀式」、「精霊たちである子どもたち」、「社会を円滑にするための贈り物」というキーワードから何か思い出すことはないでしょうか。ハロウィンとクリスマスです。実はこのクリスマスは精霊たちのお祭りでした。ヨーロッパで古くから行われていたお祭りということです。サンタクロースなどの儀式も大変古くJ・G・フレーザー氏は『金枝篇』という本の中で詳細に述べています。太陽が弱くなりはじめる秋に子どもたちに食べ物を与えお供えをするという儀式が今のハロウィンとなり、また冬に行っていた儀式が現在のクリスマスに変わりました。本来は精霊たちと関係したお祭りということをJ・G・フレーザーが莫大な史料から述べています。ドイツのサンタクロースの原型は「鞭打ちじいさん」といい、子どもを奪っていく怖い存在でもあります。カチ

つながる世界

ーナというサンタクロースや鞭打ちじいさんと同じ役割をするネイティブ・アメリカンのサンタクロースもいます。最初に、現在の感覚だけで見ると勘違いすることがありますよ、と言ったことのひとつは、ハロウィンやクリスマス、サンタクロースにもあてはまりません。一九五三年のフランスのデジョンという町の教会で、サンタクロースが首を吊られて火あぶりにされたという記事が新聞に掲載されました。教会はサンタクロースを異教の存在だとしているということです。

ネイティブ・アメリカンにも重要な冬の儀式がございます。それが「ハマツア」という儀式です。これはネイティブ・アメリカンの北西海岸で生活をするクワキウトウル族の儀式です。「ハマツア」は真の権力である自然界の王であり人を食べる存在でもありません。成人になろうとするものはその精霊の王に一度食べられます。食べられた後、写真のように真ん中から出てきます。出てきた人はハマツアそのものになっています。人食いの存在になっているのです。ハマツアになっている間は社会から消えています。自然界の立場になつていくということです。そこから無事に帰ってくるということが成人の儀式だったようです。どうしてそのようなことをするのでしょうか。若者が人食いの立場になる、相手の立場になつて自然の驚異を知るということは、自分たち人間が絶対的な頂点にいると勘

違いたくないように戒めるといことです。もし人間が動物や自然に対して傍若無人な対応をとれば、自然は富を与えてくれなくなると考えていたようです。ハマツアの中から出てきた時には、同じ景色を見ても入る前と後では違った景色に見えるということです。社会人になるための通過儀礼です。日本で言えば修験道が山に入る儀式もその一つなのではないかと思えます。こうして一回自然界に行くということは、社会から消えます。「死」を意味します。自然界から戻ってくるので「再生」生まれるということです。このような通過儀礼を経験した人たちだけが成人になるとされています。これからみなさん成人式を迎えますが、成人になる、社会人として認められるということは、相手側の立場になる、相手のことを考える、想像することができるといことであり、どの世界でも、社会人、成人になるために重要なことだと思います。

この社会人と、まだ社会人になっていない人、また自然と我々の社会の中間にいて両者を繋ぐ役割をするのがシャーマンと言われる人たちです。シャーマンの厳しい修行の様子が多く記録されています。このシャーマンと呼ばれる人と同じような位置関係にいる人が、僧侶などを含めた宗教者たちだと思います。中でもチベット仏教の僧侶に特にそれを感じます。チベットの僧侶の役割の一つに、仲裁をするという役割があります。ジャッジ

つながる世界

をする、判定をするということではありません。お互いの話を聞いて、上手く取りはからって話をまとめる。どっちが良い悪いを判定することではありません。裁判所の様子を思い出してください。裁判官がいて、弁護士と検察官が争っています。この構造がスポーツに取り入れられたものがテニスです。テニスをするフィールドをコートと言いますが、裁判所で争う所もコートと言います。このような裁判の状態ではありません。お互いを結びつけて取り計らいをするというのがチベットの僧侶の大事な役割です。このシャーマンとか、間を仲裁する役割をしているのが『もののけ姫』に登場するアシタカです。サンは、精霊である存在に育てられた人間です。タタラ場にいるエボシという人は人間の文明の象徴である「鉄」を作ります。山を切り開いて作っています。山が富のある場所という考え方ではなくて、自分たちの文明のために使う単なる道具の存在としてしか考えていないように思えます。その二人が対決をする場面があります。その二人を仲裁するのがこのアシタカです。アシタカも縁があってもものけの世界に入っていきます。このような視点で『もののけ姫』をみるとまた違った見え方ができて楽しいかもしれません。

「ハウ」とか「タマ」とか「エスプリ」などの精霊たちは遥か古代に洞窟で表現されたイメージの延長線上にいる存在です。彼らの存在をどうとらえるか、また自然をどうとら

えるかによって、私たちの日常生活の物事のモノの見え方とか視点がずいぶんと変わって
 くると思います。こういった対称性の思考や昔の人々の考え方は現代の私たちにあらゆる
 ことを投げかけてきていると感じます。中でも私が注目することは、一つは繋がることとす
 ること二つ目は相手の立場に立つということです。先日、朝食をとっている時に、テレビ
 でミャンマーの大臣が日本の郵便サービスの状況を視察に来たというニュースを放送して
 いました。郵便を出して、翌日にはだいたい届きます。遅くても二、三日以内には必ず届
 きます。その郵便物がなくなることもほとんどなく、家まで運ばれてきます。日本では当
 たり前のことです。しかしこのサービスは、世界で見ると珍しいとのことでのそのシステム
 を視察するために来日されたようです。この他、日本の様々なサービスや電車に乗る時の
 並び方などが紹介されていました。その映像を受けてコメンテーターが言った言葉が印象
 的でした。「あるのかないのか分からないけれど、そのおかげで非常に手触りが良い、心
 地の良いものが日本のサービスです。」と。学生の皆様は、様々な分野に就職されると思
 います。つつい仕事に対してお金との関係で考えがちですが、目に見えない「思い」を
 感じられるのが日本の良いところだとおっしゃっていました。初めに申しましたように、
 サービスでもそうですが、目に見えない物事や気配りは様々なものを見て感じ、また多く

つながる世界

の人と出会って、感じたことを心の中で蓄積されていなければ、それらの表現は出てこないということです。

私が好きな人物の一人に河合隼雄氏があります。彼は「無為」の存在が重要だと述べられ、物語の重要性を述べられています。また日本は、右に傾くかなと思つたら左に揺れ戻し、前に傾くかなと思つたら後ろに戻るといようなバランスを上手くとる文化があるとおっしゃられています。真ん中に何かを置こうとせず「無為」であり何もない空洞の部分があるからそのようにうまくバランスがとれるのだろうと述べられています。日本人は、我々の知恵とか力を超えた存在に対して敬意を払います。大きな石を見れば、自分の力とか知恵を超えたものと認識し、自分たちではとても作ることができないすごい力と認めます。また大きな木を見ても同様で、それらに対して敬意を払います。そしてお年寄りとお話しするとその深い洞察、経験から発せられる言葉に対して敬意を表します。どの信仰、どの祈り、どういった思いを持っていても、自分の祈りは大切にしながらも、自分以外の他のことを考える、想像できる、というのが日本人の祈りの中にあるのではないかなと思います。イスラム教のモスクに行っても、キリスト教の教会に行っても、それらを信仰している人々が大事にしているものに対して敬意をもって、手を合わせます。その人たちが

大事にしているものだとということをも自分に置き換えて想像することができるといえる。チベットのダライ・ラマ法王が教会でお話をされる際、教会で十字架に向かい五体投地をされた後でお話をされました。そのような姿勢を見ても、仏教の根幹にはそのような思いがあると感じます。遙か古代から続く思いが仏教という形になって引き継がれていると感じずにはいられません。自分以外の他を思う、想像する、思いやる、というのは想像力のたまものです。想像力がなければそういった思いは出てきません。その想像力は我々人類の祖先が初めに獲得した能力だということです。それが四季の移ろいの中で、繊細な感覚を研ぎ澄ませ、精霊や物語・神話・祈り、また宮崎駿氏の作品や河合隼雄氏など様々な方法で変化をさせながらも大事なことを語り継いできたものが日本の文化の一つではないかと思えます。その心の蓄積があるおかげで、日本から世界に旅立っても「日本人って素晴らしいな」と評価される理由の一つになっているのではないかと思えます。しかし、最近はそのらのことを感じさせないような言動も多く見られます。人類がイメージした想像力を否定するような思考方法も日本の社会には氾濫してのように感じ危機感を抱かずにはいられません。マルセル・モースの『贈与論』の中に、

つながる世界

ローマ人やギリシヤ人は、売却を贈与や交換から切り離し、道徳上の義務と契約とを分離させ、特に儀礼を利益の間にある相違を容認するようになったからである。彼らは価値のある大きな改革を実行することによって、ある深い道徳を極めて不安定な経済を乗り越えた。その贈与の経済はあまりにも費用がかかりすぎて贅沢で人を気づかうのにわずらわされて、しかも市場、商業、生産の発展とは相容れず、要するにその時代においても不経済なのである。

難しい言葉で書いていますが、言ってみれば、精霊たちは増えたり減ったりするためそれらを大事にする思考方法は不安定な側面があります。その精霊たちがモノに宿っている。モノに様々なものが宿っていると感じて生活をしていた人々は相手のことを想像しながらモノが巡っている状態が安心した社会と考えて、モノや精霊を巡らそう巡らそうという考えの中で祈りや文化を培ってきました。しかしそれは不安定で、逆に不安だと考えた人たちが、そういった繋がりが煩わしく、めんどうという思いもありモノにある存在を切断する考え方を始めたといえるのかもしれない。その切断のお陰で今の経済が発展したともいえるのだらうと思います。切断をする思考、切っていくという感覚は分かりやすく受

け入れやすい面があります。それをわかりやすく表した宮崎作品が『千と千尋の神隠し』です。物語中に登場する「湯婆婆」と「銭婆」がその象徴のように思えます。湯婆婆は千尋の名前を奪います。過去の記憶を奪います。全てのものを奪って、切断した中に労働力として彼女を雇います。雇われた者も労働とその対価を受け入れることでそのシステムに慣れて生活をします。しかし千は名を奪われても自分の大事なものを守ろうとします。湯婆婆は利益を生みます。銭婆はそれとは逆に、愛情を持って接するという状態にあります。

これまで見てきたように、自然をどのように考えるか、繋がろうとするのか、切断するのか、道具として単に使うのか、ということは、日常生活から経済活動、些細なことから大きな大事なことまで、物事を判断する時に大変重要な役割をすると思います。どちらが正しくてどちらが間違っていることでは決してございません。それが必要だった、それが安心する文化だったからお互いに発展したということでもあると思います。今、それがあるおかげで私たちも生活をすることができます。これが正しいと言ってしまおうと、他は全て間違いになってしまいます。正座を正しい座り方だと言ってしまったがために、立ち膝や安座を行儀の悪い座り方と勘違いされるにいたったよい例だと思えます。

つながる世界

中村雄二郎氏は「神話の知」「科学の知」ということを述べられています。神話は様々なものと繋がろうとする働きをします。一方、科学は切断しようとする働きがあるということです。例えばご飯を炊くことを想像してください。今は、二合を炊こうと思うとお米を入れたら二合の線まで水を入れてスイッチを押せばご飯が炊けます。炊飯器が登場する以前は、まず薪で火を起さなければなりません。火を起すためにはどの木が適切であるかや、どの時期に切るとよいかやどれくらい乾燥させればいいのか、水の分量はどうなのか、火の強さはどのタイミングでどれだけにしなればいけないのか。あらゆることと繋がりをもち、多くのことを知らないとご飯というものは炊けませんでした。科学はポタン一つ。それらを全部切断した中で科学の知は存在します。私も含め多くの人々がその科学のお蔭で恩恵をうけています。便利になりました。ただ、この切断する考え方は強力な力を持っています。切断の思考方法が当然になってくると徐々に日常生活に変化が起きます。例えば家の構造です。これは古民家の写真です。私の住む豊永郷の木工さんが子どもの頃に住んでいた家をミニチュアで造ったものです。造ったものを民俗資料館に寄贈していただきました。こういった大きな広間がバン、バン、バンと3つあるだけです。ここで家族と他愛のない話をしていました。その他愛のない話の中から子供の躰がなされ、また

心に蓄積されるようなおじいちゃん、おばあちゃん、親から様々な話を聞いていた環境がありました。徐々に生活が変化の中で忙しい時代になりました。その社会では一緒に他愛のない話をする時間に価値が見出せなくなってきました。「個の尊重」という言葉は団欒を切断するには一見納得できる最高の言葉だと言えます。自分の時間というものを大事にし、自分の部屋が登場し、部屋が仕切られ個人の部屋、お父さんお母さんの部屋、おじいちゃんおばあちゃんの部屋に分かれていきます。家族の中でも個の尊重、個の重視で、部屋のスタイル、家のスタイルも徐々に変化しました。この思考方法が社会の常識となると人と人の関係に対する価値にも変化が起きます。ネアンデルタール人やクロマニヨン人の時代や縄文時代は、その場にいるという土地の縁がありました。地縁です。近所の人たちと一緒に共同で生活をしないと成り立たない側面がありました。地縁は大事なものだと考えられていました。昭和三十年代を描いた映画の『三丁目の夕日』などにはその様子が描かれています。私が子供の頃も映画と同様の近所づきあいがありました。しかしそれらの地縁が煩わしいと感じられ始めたのだらうと思います。マンシヨンの時代になると特にその傾向が強くなり隣近所に誰がいるのかがわからない状態に違和感がなくなります。あらゆる条件や社会事情からそのようになっていったのだらうと思います。また血縁、血族

つながる世界

の縁も徐々に離れていき「音沙汰がないね」ということになってきます。そのような社会で重要視されるのが職縁と言われる職業の縁です。自分たちが働く職場の縁です。しかしいつかは退職し辞めなければなりません。辞めてしまうと職縁がなくなります。地縁がなく、血縁がなくなり、そこに過度な個人の追求をしようとしてしまうと、孤独になってきます。そこから生まれた言葉が「無縁社会」だと思います。社会というものは本来、あらゆるものが繋がる場です。それが無縁、縁がない、切断されているということなので「無縁社会」という言葉になったのです。この言葉の違和感を持つと同時に今を表す言葉だとも思います。最近このような社会で河合隼雄氏のいう「揺れ戻し」がおこっているように思います。ソーシャルネットワークというものです。ツイッターとかブログとか、いろんなことで若い人たちは繋がろうとしているようにみえます。私の住む高知県は、ソーシャルネットワーク普及率が最下位です。その理由は良い見方をすれば、ネットワーク上ではなく身近に繋がる場があるという言い方もできます。一方高知県人の性格を考えますとソーシャルネットワーク自体が煩わしいと考えているのかもしれないと思います。

これからみなさんは、様々な職業に就いて、仕事をします。その中でどうしても目先の経済活動に囚われて、その経済活動が充実してこそゆとりが持てると考えてしまいがちで

す。お寺やお宮や文化施設に行こう、美術館に行つて芸術作品を楽しもう。観劇しようなどというのは二の次になってしまいます。どうしてもピラミッドのような形に考えてしまいがちです。経済活動という基盤があつてこそ精神的活動を楽しめるということです。私は、この精神的活動と経済的活動の両者、また「神話の知」と「科学の知」は、ピラミッドの形ではなく、車の両輪ではないかなと思います。美しいものを見て美しいと思える、感動する心、面白いものを見て面白い、お祈りをしたいという思い、そういつた蓄積が心でなされ、その心が各人の経済活動を支え、様々な場面で判断をしていると思うからです。その判断が社会を作っていると考えますと、やはり、両輪という感覚でいることが自然な気がいたします。これからみなさんはあらゆる場面で判断を求められると思います。大学の講義を受けて感じることもいっぱいあると思います。その感じたものを心に蓄えてください。また様々なアルバイトやサークル活動、部活などを通して、繋がりを持つて、様々に感じ思考し心に多くのことを蓄えて生涯にわたつて多くのことを、勉強という意味ではなく学んで欲しいなと思います。そして良い眼を持つていただきたいと思ひます。良い眼を持つことが、「MASTER OF LIFE」人生の達人になる条件だということです。『MASTERキートン』のセリフに出てきます。良い眼を持つために大学時代に

つながる世界

しかできない多くのことを蓄えてください。

宗旨にそぐわないことも述べたと思います。真言宗の僧侶としてお話をさせていただきました。他宗の僧侶を招きこのような場を設けていただいた京都光華女子短期大学の皆様に心から感謝を申し上げます。以上で終わらせていただきます。ありがとうございます。

——二〇一三年五月三十一日——